

第 8 回 ARG WI2 研究会 学生報告

平成 28 年 6 月 4 日, 5 日

1 はじめに

平成 28 年 6 月 4 日(土)と 5 日(日)に, 鹿児島県市町村自治会館にて, 第 8 回 ARG WI2(Web インテリジェンスとインタラクション)研究会が開催された. 本研究会の参加者は一般が 23 名, 学生が 7 名, 招待講演者などが 6 名の計 36 名であり, 両日とも活気のある発表や意見交換が行われた.

本報告では, ARG WI2 研究会の概要について述べ, 各セッションの中から筆者が特に興味深いと感じたものをいくつか紹介する.

2 ARG WI2 研究会概要

今回の ARG WI2 研究会では, 11 件のショート発表(12 分発表, 6 分質疑応答)と 5 件のロング発表(20 分発表, 10 分質疑応答)に加え, 1 件の技術報告, 2 件の招待講演が 2 日間に分けて行われた. 各セッション名は以下に示す通りである.

セッション 1 SNS, ソーシャルメディア

セッション 2 情報推薦

セッション 3 インタラクション支援

セッション 4 テキスト分析

セッション 5 クラウドコンピューティング, IoT

招待講演

林良平 先生「痕跡と社会的シグニファイア」

土方嘉徳 先生「ソーシャルメディアにおける心理学」

3 一般発表

一日目は SNS/ソーシャルメディアと情報推薦に関連する 2 つのセッションが行われた. その中で特に興味深かったものを紹介する.



図 1 一般発表の様子

熊本氏による「叫喚表現化によるツイート印象の変化の分析」では, ”勝ったあああああ” など, 感情を叫喚表現したツイートは読み手の印象に変化を与えるのか比較分析に関する発表であった. ユーザにアンケート調査を行った結果が報告され, ツイートに対するネガティブな傾向があり, 年齢や性別によっても感じる感情が異なることが示されていた. 現時点では年齢別または男女別の評価の比較は行うことができたが, 両方を合わせた比較分析が今後の課題として挙げられていた. 筆者の周囲でも叫喚表現のツイートは頻繁にされるので, 今後の結果も含め興味深いものであった.

鈴木氏らによる「図書館における資料探索行動に着目したセレンディピティのある情報推薦システムの提案」では推薦されたアイテムにセレンディピティを求め, 書籍のジャンル検索を利用した手法の提案がされた. 自分が求めているテーマに沿ったジャンルも閲覧しながら, セレンディピティのあるアイテムをユーザが発見できるという手法であったが, まだシステムの評価実験が行われていない. どのように比較するのか, 使用したユーザからどのような評価がされるのか期待したい.



図2 学生奨励賞受賞 岡本氏の発表の様子

二日目はインタラクション支援やテキスト分析，クラウドコンピューティングについての3つのセッションが行われた。

林氏らによる「ユーザ特性を考慮したリアルタイムリンク生成に基づくコミュニケーション支援の提案」では Facebook を対象として，他ユーザとの会話中にあるユーザが不明な単語にリアルタイムでテキストにリンクを生成し，さらにその単語に関連するユーザを提案するシステムの提案がされた。Facebook の投稿情報からユーザの特徴語を抽出し，重要度を算出，重要度によって会話中にリンクを生成し，この語彙に関係性が高い他ユーザを推奨するシステムはコミュニケーションの促進を目的としている。スムーズな会話を行うためにリンクを付与するという発想がとてもユニークだと感じた。独特な方言や地域別に異なる愛称にも対応していれば，コミュニケーションの促進に繋がると可能性を感じた。

岡本氏らによる「大量の効果音に対する効率的検索に向けての一検討」では映像作品に使用する効果音の選択を効果音同士の類似性を可視化できるシステムの提案がされた。先行研究で提案されたシステムはSERVA と呼ばれ，“文脈” “音響” “オノマトペの表徴” の3つの観点から類似する効果音が連結される。さらにマウスの操作により効果音の再生，類似する効果音の検索を行うことができる。今後お気に入り機能や履歴の記録を追加することを検討しているそうなの



図3 林氏による招待講演の様子

で今後の発展がとても楽しみである。また，今回学生奨励賞を受賞している研究者なので発表の仕方，論文の書き方共に大変参考になった。

4 招待講演

招待講演では一日目に林良平氏（鹿児島高専）による講演が，二日目に土方嘉徳氏（大阪大学）による講演が行われた。

まず林氏による「痕跡と社会的シグニファイア」と題して，モノに残された痕跡をもとに繰り返し行われてきた行動を人間は瞬時に読み取っており，知らずのうちに私たちの行動は操られているという言葉から始まった。自身で色々な場所を回り痕跡の写真を入手し，講演内で多数の痕跡を示していた。具体例として手すりやタバコの吸い殻の捨て場所，けものみちにある足跡など親しみ深い場所が挙げられた。身の回りでよく見る光景が多く，とても共感しやすい内容であった。その中で印象的な言葉は，我々は知らずのうちに先人の痕跡を追っており，先人もまた知らずのうちにシグナルを送っているということである。判断に決め手がない場合，この痕跡が手掛かりとなる。筆者も経験があり，初めて行く場所や初めて書くものは，以前同じゴールを目指した人がどのようにしていたか調べることが多い。参加者の身近にあるものを題材としている講演だったので皆が興味深く傾聴していた。



図4 土方氏による招待講演の様子

最終日の最後の講演でもあった土方氏による「ソーシャルメディアにおける心理学」では、ソーシャルメディアで表示される推薦機能では、ユーザのアクションに基づいて推薦されているが、その行動には心理学が関係しているとし、行動と心理についての調査結果の報告がされた。最も参加者の興味を惹いたのはTwitterのユーザプロフィールに使用するアイコンの種類によって行動に傾向が現れるというということだ。アイコンの分類を13種類に分類し、それぞれの行動分析を行った結果が報告された。会社が宣伝のために使用しているであろうアイコンがロゴのアカウントでは、ユーザとのやり取りがほとんど見られず、本人一人のアイコンや本人を含む複数人の写っているアイコンでは、友人らしき人物とのやり取りが多くみられる傾向があったようだ。データでは分かりにくい心理に注目した研究はまだ少ないと思うので、今後期待される興味深いものであった。

また、土方氏はWI2研究会発足時から委員長を務めていたが、本研究会をもって委員長を退任された。

5 懇親会

一日目終了後、会場である鹿児島県市町村自治会館の中にある「がんこ庵自治会館店」にて行われた。会場と同じ建物内であったので雨に濡れず移動ができ、快適であった。鹿児島名物の鳥刺しや、地元の焼酎などが用意され皆が鹿児島の食文化を楽しみ、他の大学の学生や先生との談笑もあり、会は大いに盛り上がった。



図5 12年間研究会の委員長を務めていた土方委員長が退任されました。



図6 懇親会の様子

6 おわりに

今回の研究会は2日間にわたって開催され、自分自身の研究分野ではない発表を聞くことで新たな視点で研究を見ることができた機会になった。また、自分自身初めての発表だったので他の学生の発表から反省、参考点を感じ大変勉強になった。いただいたコメントも参考に、ここで学んだことを活かし、今後色々な研究会に積極的に参加し、また発表も是非行いたい。

熊坂 瞳 (神奈川工科大学)